表一１　アンケートの配布・回収数　　単位：人

	４　年	５　年	６　年	計
配布数	４９６	４８４	４８０	１４６０
回収数	３７７	３５９	３４９	１１２５
回収率	（７６.０）	（７４.２）	（７２.７）	（７７.１）

２．被害の状況

＜被害体験＞の実態は、体験有りの児童数は３６３人で、有効回収数９５０人の３８.３％である。この数字は、著者のこれまでの多くの地域での調査に較べて、大きい差は見られない。即ち、日本の都市では、子どもたちは蔓延する犯罪の危険のなかで生活している状況を確認できるものである。件数でみると、５５０件で有効回収数に対する比率は５７.９％である。即ち、確率的には６割近い確率で子どもたちは犯罪危険と日常的に向い合っていることになる。

表一２　被害児童数

被　害　人　数				被　害　件　数	
被害有	被害無	計	被害率	被害有	被害率
３６３	５８６	９４９	（３８.４）	５５０	（５７.９）

単位：被害人数は（人），被害件数Ｈ（件）

＜学年＞別にみても大きい差違はみられない。生後から調査時点までの体験を調べているから、６年生に較べて５年生は１年間、４年生は２年間の体験期間が短いことを考えると、学年差は殆ど無いとみるべきであり、小学校も高学年になると日常生活圏も広域化し犯罪の危険が増大するとみるべきであろう。

＜性＞別にみると、やや女性の方が高い傾向を示す。

＜罪種＞別に見ると、窃盗犯が４割強、風俗犯が４割弱、粗暴犯が２割ということになる。尚、犯罪として表面化し、警察に届けられた件数と、暗数としての今回の調査結果との関係を推測すると、窃盗では暗数の３割前後が警察に届け出され、粗暴犯では５０件前後に１件が届け出され、風俗犯では１００件前後に１件が届け出されているものといえる。即ち、警察に届けだされる犯罪には莫大な裾野の未届け犯罪危険が存在しているといえる。

この数値は、あくまでも著者の限られた資料による推測ではあるが、警察に届け出られた犯罪の背後には莫大な類似の犯罪危険が存在することを銘記して一件一件の捜査に当る必要があろう。

＜罪種＞を＜学年＞別にみると、粗暴犯と窃盗犯は５年生でピークになるが、風俗犯だけは学年が進むと共に増加し、６年生になると全ての犯罪のなかで一番多くな

る。

＜罪種＞を＜性＞別にみると、男性では窃盗犯が６４％、粗暴犯が３１％、風俗犯が５％であるが、女性では風俗犯が６６％で全犯罪の2/3を占め、次いで窃盗犯の２４％、粗暴犯の１０％と続く。即ち、女性と男性では子どもの時から被る犯罪の性格が大きく異なるといえる。

表一３　被害状況（学年別）

	被害件数		被害人数	
	実数（件）	比率（%）	実数（人）	比率（%）
４年生	１５４	２８.０％	１０９	３０.０％
５年生	１９４	３５.３％	１２７	３５.０％
６年生	２００	３６.４％	１２５	３４.４％
不　明	２	０.４％	２	０.６％
計	５５０	１００.０％	３６３	１００.０％

表一４　被害状況（性別）

	被害件数		被害人数	
	実数（件）	比率（%）	実数（人）	比率（%）
男性	２４８	４５.１％	１７２	４７.４％
女性	３００	５４.５％	１８９	５２.１％
不明	２	０.４％	２	０.６％
計	５５０	１００.０％	３６３	１００.０％

表一５　被害状況（罪種別）

罪　種	件数（件）	比率（%）
粗暴犯	１０８	１９.６％
風俗犯	２１３	３８.７％
窃盗犯	２２９	４１.６％
計	５５０	１００.０％

表一６　被害状況（罪種別）（学年別）　（件）

罪　種	４年生	５年生	６年生	不　明	計
粗暴犯	３０	４２	３６	０	１０８
風俗犯	５３	７１	８８	１	２１３
窃盗犯	７１	８１	７６	１	２２９
計	１５４	１９４	２００	２	５５０

表一７　被害状況　（罪種別）（性別）　（件）

罪　種	男	女	不明	計
粗暴犯	７７	３１	0	１０８
風俗犯	１３	１９９	1	２１３
窃盗犯	１５８	７０	1	２２９
計	２４８	３００	2	５５０

表一８　被害にあった時間　（年齢別）

被害年齢	件数（件）	比率（%）
３歳	1	0.2％
４歳	0	0.0％
５歳	3	0.5％
６歳	１４	2.5％
７歳	５０	9.1％
８歳	５７	１０.4％
９歳	１２２	２２.2％
１０歳	１５７	２８.5％
１１歳	１０４	１８.9％
１２歳	２９	5.3％
不明	１３	2.4％
計	５５０	１００.0％

３．被害にあった時間

被害時の＜年齢＞では、小学校に入学する６～７歳ぐらいから被害にあい始め、日常生活の行動範囲が広がる９歳ぐらいから被害にあう件数が急増する。尚、１１～１２歳になって件数が減少するのは、１０歳以下は全調査対象者が該当するが、１１歳は４年生が、１２歳では４・５年生が該当しないことによる影響が大きく、この年齢層で犯罪被害者が減少するとは、他の調査からも言えないこともあり、調査方法に起因するといえる。

被害時の＜月＞別傾向では、子どもの戸外生活が活発化する４月頃から増加し始め、７月頃から１１月頃までが高い割合いを示す。このことは、防犯パトロール等が夏休みや冬休みに集中する現状に疑問を投げかけるものである。この期のパトロールは子どもの非行防止を主目的とするものであろうが、犯罪危険からの防止を目的とすれば、子どもの被る犯罪は必ずしも長期休暇に集中するものではなく、もっと広範囲に分布していることを配慮する必要が求められている。＜罪種＞別にこの傾向をみても大きな変化はない。どの犯罪も４月頃から１１月頃まで広範囲に分布している。風俗犯はやや日暮れの早い冬季にも多い。

表一９　被害にあった時間（月別）

被害月	件数（件）	比率（％）
１月	１１	２.０％
２月	９	１.６％
３月	４	０.７％
４月	２９	５.３％
５月	４２	７.６％
６月	３９	７.１％
７月	６４	１１.６％
８月	６０	１０.９％
９月	６４	１１.６％
１０月	５８	１０.５％
１１月	６２	１１.３％
１２月	１８	３.３％
不明	９０	１６.４％
計	５５０	１００.０％

表一１０　被害にあった時間（罪種別）（月別）　（件）

被害月	粗暴犯	風俗犯	窃盗犯	計
１月	４	３	４	１１
２月	０	７	２	９
３月	１	２	１	４
４月	４	１６	９	２９
５月	７	１２	２３	４２
６月	７	１１	２１	３９
７月	１１	２６	２７	６４
８月	１７	１８	２５	６０
９月	９	２４	３１	６４
１０月	１３	２５	２０	５８
１１月	１１	２５	２６	６２
１２月	１	８	９	１８
不明	２３	３６	３１	９０
計	１０８	２１３	２２９	５５０

被害時の＜時刻＞では、１５時から１７時に集中しており、時刻不明を除けば2／3がこの時間帯に集中している。季節によって差（夏期は７時前後まで）はあるが、子どもたちが放課後の地域での生活の中で、大半の犯罪にあっている状況がうかがえる。

＜罪種＞別にみても、時間的に余り大きな差異はみられない。当然の事ではあるが、窃盗にあった時刻が不明というのが多いのが特徴的である。何時頃盗まれたか判らないということである。

表一１１　被害にあった時間（時刻別）

被害時刻	件数（件）	比率（％）
８時	８	１.５％
９時	１	０.２％
１０時	４	０.７％
１１時	１３	２.４％
１２時	１３	２.４％
１３時	２１	３.８％
１４時	４６	８.４％
１５時	１１２	２０.４％
１６時	１２４	２２.５％
１７時	７４	１３.５％
１８時	３５	６.４％
１９時	１５	２.７％
２０時	６	１.１％
２１時	２	０.４％
２２時	１	０.２％
２３時	２	０.４％
不明	７３	１３.３％
計	５５０	１００.０％

表一１２　被害にあった時間（罪種別）（時刻別）　（件）

被害時刻	粗暴犯	風俗犯	窃盗犯	計
８時	０	５	３	８
９時	０	０	１	１
１０時	０	１	３	４
１１時	２	６	５	１３
１２時	３	５	５	１３
１３時	５	１１	５	２１
１４時	１０	２４	１２	４６
１５時	２８	４３	４１	１１２
１６時	２６	５１	４７	１２４
１７時	９	３６	２９	７４
１８時	１０	１１	１４	３５
１９時	４	５	６	１５
２０時	１	２	３	６
２１時	１	１	０	２
２２時	０	１	０	１
２３時	１	１	０	２
不明	８	１０	５５	７３
計	１０８	２１３	２２９	５５０